関西自然保護機構会誌 *26*（*1*）：*1*－*2*，　*2004*

巻　頭　言

コウモリと戦争遺跡

三重県科学技術振興センター　佐　野　　明

防空壕や地下軍需工場，トーチカ（コンクリート製の防御陣地）など第二次世界大戦当時の遺跡が今も各地に残る。その数は，国内外合わせて数十万に達すると言われている。しかし，それら戦争遺跡の多くが，今では洞穴性コウモリ類の貴重な生息場所になっていることはあまり知られていない。

例えば，私の住む三重県では住家性であるアブラコウモリ（イエコウモリ）のものを除いて，コウモリ類のねぐらが64か所確認されているが，うち12か所が戦争遺跡だ。確認されたのはキクガシラコウモリやユビナガコウモリなど5種。絶滅危惧種のテングコウモリも含まれる。夜行性である彼らは遺跡を昼間の休息場所として利用するだけでなく，そこで冬眠をし，出産や子育てもしている。

県内の戦争遺跡については，学校関係者や市民団体が中心となって，今も精力的な調査活動が続けられているので，今後さらに多くの「コウモリが住む戦争遺跡」が見つかることだろう。

しかし今，多くの戦争遺跡が老朽化にともなって取り壊され，開発のために破壊されている。現在のところ，文化財として指定・登録された戦争遺跡は全国でわずか70件。ほとんどの戦争遺跡には破壊を防ぐための法的規制はないのが現状である。

遺跡の多くは私有地にあり，保存には地権者の同意が不可欠である。それぞれの地域で遺跡の保存運動に取り組む人たちとも協力して，平和教育とコウモリ類保護の双方の観点から保存の必要があることを，地権者のみならず地域住民にも広く知ってもらい，世論を高めていくことが重要であろう。

開発による破壊だけでなく，新たな脅威もある。現在，国土交通省と農林水産省は，全国に残る防空壕や格納庫などの地下施設5,003か所のうち777か所に陥没や崩落の危険があるとし，「特殊地下壕対策事業」として，これらの埋め戻しを進めている。道路や家屋が陥没する危険がある場合はともかく，子どもたちが入ると危険と言うのなら，施設全体や開口部を埋めるのではなく，「人は入れないが，コウモリは通過できるような柵」を設置してほしい。このような柵はバット・ゲート（bat gate）と呼ばれ，生息する種に合わせてさまざまなタイプのものがあり，各地でコウモリ類の保護に効果をあげている。

戦争遺跡はその保存とともに，一般公開して平和学習や歴史教育に活用すべきものとされ，見学会や学習会がしばしば開催される。中には観光施設として常時開放され，年間数十万人が訪れる場所もある。

しかし，コウモリ類のねぐらに多数の人間が入ることは大きな攪乱をもたらし，結局は生息場所の放棄に繋がるケースも多い。公開の方法や時期については，ねぐら付近への立ち入りを制限したり，特に出産哺育集団が見られる遺跡では6～8

月の公開を避ける等，コウモリ類に対する影響を最小限にとどめるよう配慮も必要になってくる。戦争遺跡の保存に取り組む人たちにも理解と協力を求めたい。

戦争の世紀とも言われた20世紀が去り，新しい世紀もすでに4年目に入った今，世界の情勢はなにやらキナ臭い。そのような中で，戦争の悲惨さや愚かさを次代に伝えていくためにも，戦争遺跡の持つ意義はますます高まりつつあるように思える。

私はかつて，三重県内で戦争遺跡の保存に取り組む人から「戦争遺跡がコウモリなど野生動物にとっても必要なものと知り，保存の必要性を訴える上でとても心強い」と言われたことがある。立場や興味は異なるかもしれないが，野生生物の保護を望む者からも，戦争遺跡の保全を訴えていくことが必要だと思う。